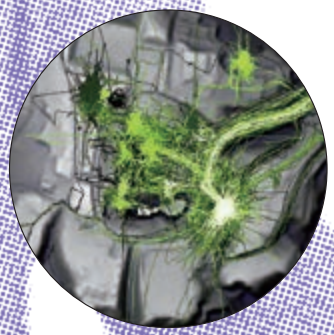
S-face

SFC makes the future through researches

ランドスケープに千年の命を吹き込む

石川 初

×



VOL.
016 /100
2016.Oct 発行
和の色：桔梗色

細く長く生き続ける集落にこそ「上質な空間」のヒントがある

持続可能な開発が求められる現代にあって、「人と自然の共生に向けたランドスケープのあり方」は重要なテーマです。
また、地方の人口減少が進む中、地域の潜在資源を掘り起こし、ランドスケープデザイン(※)に展開する手法は「過去と未来をつなぐ技術」です。
石川初教授は、千年以上にわたって「生産」と「生活」が持続的に営まれてきた集落や地域を調査することを通じて、
人と自然との両面をコーディネートし、恒久的に魅力を維持しながら、その価値を最大限に活かすランドスケープデザインを模索しています。

※その土地が持つ諸要素を基盤にして、都市空間や造園空間、まちなみといった景観を設計、構築すること。

応用的ランドスケープ思考が「落ち着いた風景」をつくる

私は長年にわたって、ランドスケープの設計実務に携わってきました。その経験を踏まえて、「人の住む場所」「人が生存する場」のデザインについて研究しています。

ランドスケープデザイナーとして何らかの対象に向かうとき、私は常に対象を取り巻く、時間的・空間的に「より広域のスケールを考慮する」ことを心がけています。そして、そのことによって、「いかに維持管理が容易なランドスケープを作るか」「空間デザインとしていかに質の高いものを作るか」に心を砕いてきました。

ランドスケープの重要な構成要素である植物を例に考えてみましょう。対象地域に大きな木が存在するということは、その場所に、長い時間をかけて成長するだけの良好な環境が持続的にあったということを示しています。このように、時間的・空間的に「より広域のスケールを考慮する」ことで、持続可能なランドスケープをつくることができます。また、デザインの力によって「思わず人が手入れをしたくなる」ような周辺環境を整備できれば、持続可能性はさらに向上するでしょう。

このように、「既存の土壌・気候・植生」と「人間の思惑」がしだいに落とし所を見つけて最適化され、“動的平衡状態”が生まれたときに、はじめて「落ち着いた風景」が生まれるのです。こうした「応用的ランドスケープ思考」が、質の高い空間をつくるのです。

震災を契機に始まった「千年村プロジェクト」

私はここ数年、いくつかの大学の研究室などが合同で取り組んでいる「千年村プロジェクト」に参加しています。「千年村」とは、数々の災害や社会的変容を乗り越え、千年以上にわたって「生産」と「生活」が持続的に営まれてきた集落・地域のことを指します。

日本全国に点在する「千年村」を発見し、調査・公開することによって、今後の長期的な住環境のあり方を考え、実践するというのが「千年村プロジェクト」の目的です。

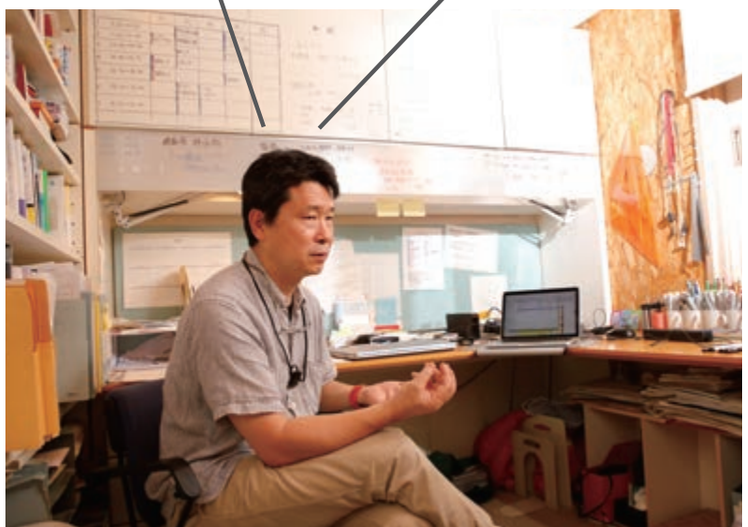
発端は、2011年の東日本大震災でした。震災直後、さまざまな建築家グループによる復興支援活動が始まっていましたが、私たちはそれとは少し違う形のものを考えようとしていました。調査や検討を重ねるうちに、建築史という長期的に物事を見ていく集団の役割として「“壊れてしまった村”に注目するのではなく、“壊れていない村”を調査し、その“丈夫さの秘密”を探っていくことこそが重要なのではないか？」という問題意識が芽生えたのです。そこで、千年以上にわたって生産と生活を維持し続けている集落・地域の調査をスタートしました。2014年からは関東と関西に研究拠点を置き、環境・集落・共同体に関する諸分野の研究者・実務者らと学生たちによって運営されています。

Millennium Village Project
千年村プロジェクト

2011年の東日本大震災を機にスタート。全国に点在する「千年村」を発見し、調査・公開することで、今後の長期的な住環境のあり方を考え、実践するのが目的。関東と関西に研究地点を持つ。

Making a Guide Book
ガイドブック作成

徳島県神山町で実施される「まちを将来世代につなぐプロジェクト」の一環で、町の風景をフィーチャーした図鑑や暮らしの図鑑、地域の鑑賞ガイドブックなどを作成。現地に赴き、取材を進めている。



「応用的ランドスケープ思考」を武器に戦う人材を育成

私の研究室では、現在、徳島県神山町を対象に千年村プロジェクトの方法を応用しながら“生存のランドスケープ”を探すプロジェクトを進めています。この町は吉野川の支流・鮎喰川（あくいがわ）のほとりに広がる山あいの町。人口は6300人ほどで、高齢化率は46%に達していました。しかし近年では、大都市に本拠を置く企業が過疎の山村にオフィスを開くなど、移住者や企業が集まり始め、築150年の古民家を活用して、IT企業の若者たちが仕事をしています。

「麗しき風景」を冷凍保存のように残すのではなく、時代の要求に応じて暮らしをアップデートしてきた“千年村の特徴”を色濃く残す町なのです。

私の研究室では、神山町の「まちを将来世代につなぐプロジェクト」の一環として、風景図鑑や暮らしの図鑑、地域の鑑賞ガイドブックなどを作成し「これまでの千年とこれからの千年」を考えるための、いくつかの媒体をデザイン・制作する予定です。

今後は、こうした活動を通じて、SFC（慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス）という学際的な環境に身を置きながら、広い意味での「応用的ランドスケープ思考」を追求したい。そして、学生たちとの対話や活動を通じて「ランドスケープデザインという思考を武器に戦える人材」を、社会に送り出していきたいと考えています。

Profile
石川 初
慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科教授。ランドスケープアーキテクト。1964年、京都府宇治市生まれ。鹿島建設株式会社建築設計本部、株式会社ランドスケープデザインなどを経て現職。デザイン教育や地形・地図などの研究と表現などの活動も行う。

詳しくはWebサイトへ

詳細インタビューや動画もご覧いただけます

S-face　検索

慶應義塾大学SFC研究所
慶應義塾大学 湘南藤沢事務室 学術研究支援担当
〒252-0882 神奈川県藤沢市遠藤5322
Tel: 0466-49-3436（ダイヤルイン）
E-mail: info-kri@sfc.keio.ac.jp